

(日一月二十年四十正大
可認的便郵 稱三箇

社會連帶の精神

同潤會の成立活動を喜ぶ

挽近世界に流れてゐる主なる思想、然も今後益々高潮されて來るであらう所のものは社會連帶（ソーシャル、ソリダリチー）といふことである。この思想は社會は一つの有機體であるか否し社會の一人が不幸に陥つたとすれば、それは恰も自分の身體の中一本の平方なり指なりが病に冒されたことである。故に社會連帶も精神的方面をも含むといふことである。この思想は社會連帶の唯物的たるに反し、佛教もその範圍も廣く一層徹底する考へる。

同様、打ち棄て置くべきこと同様、個人主義的思想が吐ではなく社會全體が責任を負ふべきであるといふのである。個人主義的思想が吐溢せる時この聲を聞くと何となく心地よく新しい響を與へるけれどもこれは決して新しいものではない元來社會連帶といふ語はローマ法等に現はれた法律上の用語であつたものが後ち社會學上の言葉として用ゐらるゝやうになつたものである。現今東方亞細亞の光として彼の行き詰れる西歐の思想に燐然たる光明を放ちつゝある深遠なる佛敎の教理哲學の核心も社會連帶の思想であるともいひ得る。唯々彼れと異る所はその連帶といふことが彼れの唯物的たるに反し、佛教のそれは物質的たると共に精神的方面をも含むといふことである。故に社會連帶といふことを本當に吟味するには佛教の思想によつた方がその範圍も廣く一層徹底する考へる。

普通此處に茶椀なりベンなりが個立たりが在るとする場合、單に茶椀なりベンなりが個立して存在するであらうか。佛教では如何なる場合でもこの個在を否定する。如何なる物でも單に

獨立せる存在は認めずあらゆる條件が集て綜合進動する上に成り立つものとする。例せば、私は今この原稿用紙に字を書いてゐる。この字は直接には書かれる用紙があり、書くべきから、自分のものといふ勝手だといふことは許さないことである。由來自分の腕で儲けたのであるかの金はどんなに使はうとも、自分と他人（社會）の關係も自ら明かとなる失ひ即ち死物となる。此處に考へてくると自分と自分とはそのものゝ存在の意義はそのものゝ存在の意義であるといふものが無い。この金は依託保管にござぬものである。（この想は法理學上からも考へられて來た）況んやその金

婦の青年團、婦人會等の公體と共に自餘の諸團體とを與へられ有終の美姉の總動員的の協力とをげられんことを切望し筆する。(五、十二、十七)

は迷信となつた。天には吾たのであります。
より々が見ゆる星が五つある。
木星、火星、土星、金星、水星、此星は非常に大きいから其の運行によりて人事が決定せられると考へ、人間界が尤も必要なりとしたのが此の五星である。之を五行と云ふたのです。此五行はペルシャにもあるから或はペルシャから來たのかとも知れん。ペルシャから支那に來たのか支那からペルシャに行つたのか夫れは分らん、此の五行が春になれば木、夏は火、秋は金、冬は水、土は土用、土用は四季にある。秋は金である處から秋の風を金風玉露を拂ふと云ふ言葉がある。之を方角にすると東は木、南にしは火、西は金、北は水、眞中が土、之を人間の五臟六腑にすると肝臓が木、心臓が火、肝臓が土、肺が金、腎臓が水と云ふ工合に當る人のです。斯く五行が凡れの物に當てはめる信仰が行はれたのであります。肺が悪

より人間界が並に彦謹援護を擱て擱を舉て開共してはあります。

木星、火星、土星、金星、水星、此星は非常に大きいから其の運行によりて人事が決定せられると考へ、人間界が尤も必要なりとしたのが此の五星である。之を五行と云ふたのです。此五行はペルシャにもあるから或はペルシャから來たのかとも知れん。ペルシャから支那に來たのか支那からペルシャに行つたのか夫れは分らん、此の五行が春になれば木、夏は火、秋は金、冬は水、土は土用、土用は四季にある。秋は金である處から秋の風を金風玉露を拂ふと云ふ言葉がある。之を方角にすると東は木、南にしは火、西は金、北は水、眞中が土、之を人間の五臟六腑にすると肝臓が木、心臓が火、肝臓が土、肺が金、腎臓が水と云ふ工合に當る人のです。斯く五行が凡れの物に當てはめる信仰が行はれたのであります。肺が悪

より人々に數の單位として十を基とし、故に十は重也。之を甲乙丙丁云々十干と云まひす。之を「キノイ」キノトと云ふ様に読みますが、きのえい（え）は兄、きのとの（と）は弟と云ふことで、木の兄弟は幹であります。「きのえ」「きのと」「ひのえ」「ひのと」と讀むが一體甲元來甲乙丙丁は符號であつて、萬物發生の順序を示します。丁は丁壯の義で出來上たもので甲は符甲の義也とあります。萬物が甲羅を破つて出ると云ふ形であります。即ち甲乙丙丁と云ぶ十干の出來る順序を云つたものでそれを火木土金水に配當したるもので「きのえ」「きのと」と讀むのであります。

信仰の人々へ

| | | |
|----------------|-------------------------|-------------------------|
| | | 吉 |
| 品一行 | 社 | 歳末書懷 |
| 人等の使用され | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 | 懇々の之號で本紙も昭和五年を終ることになつた。 |
| よりの笑を漏して今年は實に甘 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| 儲かるについては社會のあ | 回顧する其時、自分に快心 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| らゆる條件の集成の結果で | 回顧する其時、自分に快心 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| あるに於てをやである。所 | の笑を漏して今年は實に甘 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| 謂世間様のお蔭で儲けたの | 道を静かに回顧すれば實 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| 立し、その活動のスター | 道を静かに回顧すれば實 | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| 同潤會 | なるものが | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| | と各宗寺院善華會とによ | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |
| | なるものが | 毎年のこと乍ら私達は年末年始終ることになつた。 |

